

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

1995

6



junji

第94巻 第6号 日本幼稚園協会

## 保育者研修シリーズ

- 園内研修資料として最適
- 保育の見直しに役立つ

新しい保育の考え方による保育技術の実践書で、中堅保育者としてこれだけは身につけておきたい保育方法が分かり、保育全体が見通せるようになる。中堅保育者の保育の見直しにも好適。日常、保育現場で起こる疑問や迷いを、子ども理解、子どもの生活と計画、援助、環境など四種類に分け、それぞれに実践例をつけて問題点に答えたもの。子どもと保育の基本がよく分かる。

### ① 子ども理解のポイント

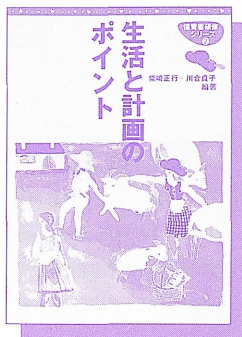


保育は子どもをよく知ることから始まる。子どもの生活の理解、育ち合いの理解、発達の違いの理解、関係の理解などに視点を当てベテラン保育者が実践事例をそえて子ども理解のポイントを示したもの。

柴崎正行＋今井和子 編著

B 5 判・128頁・定価 2,000円 (本体 1,942円)

### ② 生活と計画のポイント

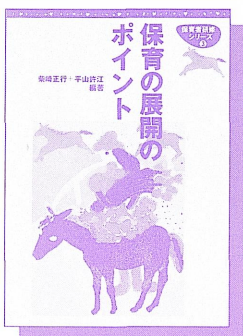


保育計画の作成、計画と実践の見直しをはじめ、教育過程の編成までを書きやすい記録づくり、使いやすい計画づくりに焦点をあてて生活に合わせた計画作りを解説したもの。子ども中心の保育への見直しに役立つ本。

柴崎正行＋川合貞子 編著

B 5 判・136頁・定価 2,000円 (本体 1,942円)

### ③ 保育の展開のポイント

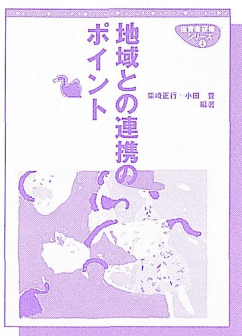


保育実践でむずかしいとされている援助の仕方やタイミングについて解説したもので、子どもの気づきや工夫、発想を生かした展開を中心に園生活の流れにそった展開方法をまとめたもの。子どもをいきいきと生活させる保育の見直しに役立つ。

柴崎正行＋平山許江 編著

B 5 判・168頁・定価 2,000円 (本体 1,942円)

### ④ 地域との連携のポイント



子どもの成長は環境の生かし方によって大きく左右される。保護者との信頼関係、保護者の要望と悩み、地域との信頼関係、地域の行事、環境、人材の生かし方、保育者間の連携など、地域に開かれた園づくりのポイントが分かる本。

柴崎正行＋小田 豊 編著

B 5 判・146頁・定価 2,000円 (本体 1,942円)

キンダーブックの  
フレール館

# 幼児の教育

第94巻 第6号



# 幼 児 の 教 育 目 次 — 第九十四卷 第六号 —

© 1995  
 日本幼稚園協会

子供讃歌…………… (4)

状況の中に埋没しているだけだったら保育者の自我の成長はない

津守 真…………… (6)

子どもと共に生きる…………… 阿部 なを…………… (11)

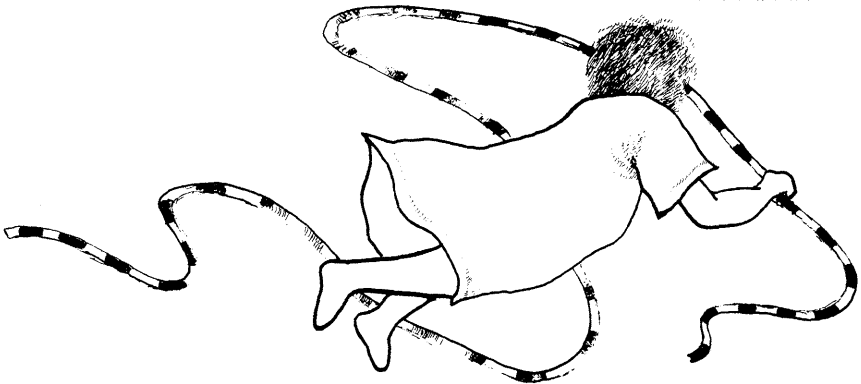
坂元彦太郎先生 追悼

岡山での坂元先生…………… 秋山 和夫…………… (18)

坂元彦太郎先生を偲んで…………… 村山 英子…………… (21)

坂元彦太郎先生を偲んで…………… 立川多恵子…………… (23)

思い出のひとつま…………… 村田 修子…………… (26)



トボスにおける発達 第二回……………無藤 隆…(29)

園長室の窓から(2)

保育環境について考える(1)……………原口 純子…(37)

子どもたちへのまなざし(13) 話すこと・聞くこと……………松井 とし…(46)

保育実践のバイオニア——氏原鏝(2)……………守隨 香…(48)

ある日の育児日記から(64)……………佐藤 和代…(56)

呼応しあう関係をめざして……………伊集院理子…(57)

表紙・松永 潤二／扉題字・津守 真  
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・彌永たたえ

編集委員・田代 和美／本田 和子

梶田 正子・伊集院理子

編集部・大沢 啓子



# 子供讃歌

ジャガイモの収穫がすんだら…、  
ゆでて、おいしく、いただきまーす!!

撮影・平野 清





# 状況の中に埋没しているだけだったら 保育者の自我の成長はない

津守 真

子どもたちの間で物の取り合いのようなことが起こったとき、大人は、眼前の状況で、大人の価値判断によって、どちらかを善とし、あるいは悪として、その間を裁き、またとりなしをしようとする。しばらく時間が経って子どものおかれている全体状況が分かってくると、そんなに大人の価値観だけで割り切れないことが分かってくる。

—

四歳のA子は、傍らにいた男の子のT雄と一緒に、母親とホットケーキを焼いていた。私は足の悪いSさんと一緒に床の上をひざで移動していた。

Sくんはホットケーキを見つけると、まっすぐに這ってゆき、A子のホットケーキを一



切れ攪んだ。それは一瞬の出来事だった。

A子は激しく泣いて泣きやまなかった。私も母親も何か言いながら、ゆずらないA子の前に立ちつくした。その声に、一緒にホットケーキを焼いていたT雄も泣いた。

Sくんは日頃、発作が多く、睡眠も不規則で、休む日が多い。

A子が激しく泣いたとき、こんなに弱いSくんがようやく自分の力で手を伸ばしたホットケーキだから、一切れくらい分けてあげても当然ではないかと私は思った。そんな私がかようなことをかけてもA子はゆずらず、もっと激しく泣いた。A子は、弱い子にゆずることは頭で分かっているとしてもその場の気持ちが納得しなかった。大人が傍らにいても状況を複雑にするばかりだろう。私はSくんを誘ってその場をはなれた。

## 二

A子の母親は、私共の養護学校の幼稚部に在籍している兄と一緒に、ほとんど毎日A子連れて保育に参加している。そのほかにも二、三名、母親や弟妹が保育に加わっている。私共は、これを統合保育のひとつの形と考えて歓迎している。保育の中では母親は私共の同労者である。この日断らずに他人のホットケーキを取ったSくんに対して、私が叱らなかったことをA子は怒ったのだらうと、私は母親と話した。家庭でも兄との間でしばしばこういうことは起こるのださうである。

A子は、障害の子どもと自分とを区別していない。A子にとっては、障害の子も自分も対等である。障害の子が弱者で健康な子どもが強者だという図式もまだできていない。A子の人間観は徹底している。私のことばかけは、こういうA子の問題意識にふれなかった。そのあといつのまにか、私共はさっきのことは忘れて一緒にになって動き回って楽しんだ。

### 三

次の日、保育の中で忙しく過ごした午後、私はこの母親と保育室で出会った。きのう、帰り道A子はいいい機嫌で、帰宅してからも、とても良い子だったんですと母親は言った。夜も、自分からお風呂に入り、衣服をきれいにたたんだ。寝るときA子は母親にしみじみと「あたし大きくなったら、T雄さんと結婚するの」と言った。母親がどうしてとたずねると、「T雄くんは、あたしが泣いたときに一緒に泣いてくれた」と話した。

そのことから思い返してみると、あのとき、朝からT雄とA子はホットケーキと一緒に作っていて、とても楽しく盛り上がっていた。A子はもっとそれをつづけたかったのに、その楽しかった共同のひとときが、S夫が手を伸ばしてホットケーキを取ったあの瞬間に破られてしまった。A子にしてみると何よりもそのことが残念だったことが分かる。

あのとき、外部の大人の眼からは、「何故そんなに頑固に泣きつづけるのか」「もっとS夫のことを分かってくれてもよいものを」と考えるが、大人が考えるようにA子が我儘

だったわけではない。子どもが生きていた状況は、それとは違う次元のことだった。A子が激しく泣いていたときも、A子の心はT雄とつながっていた。「こう考えると子どもを育てているということは本当に面白いことですね」とこの母親は言った。

保育の最中には大人も子どもとかかわる状況の中に巻き込まれており、しばしば子どもが生きていた状況にまで眼を広げることができない。保育の後に、その状況を思い返すとき、保育者は状況から一步はなれて子どもの視点から見直すことができる。こうして、より広い自分をつくることが保育者の大きな課題である。状況の中に埋没しているだけだったら保育者の自我の成長はない。一九九五年は、国連によって「国際寛容年」と定められている。これからの保育の質を向上させる上にも重要な課題である。

### 戦後五十年ということ

S 駅の前で、トラックの上から、戦後五十年たって、五十年前と現代とでは世界は違っているのに、国会が不戦決議をするなどとは時代錯誤だという意味のことを右翼が演説していた。私は心の奥底に沸き上がる怒りを抑えながら通り過ぎた。

戦後五十年ということが新聞やマスコミで言われる。ひとつの時代の節目として反省し、ひとつひとつ丁寧に歴史の点検をする機会であることには間違いない。

今年こういうことが強調されるのは、この五十年の歴史を一生涯の中で体験して老年を

迎え、若かったときの自分の体験を重ね合わせて歴史の意味を問い直すことが生涯の内に可能になった長寿時代に現代が突入したこともひとつの理由であろう。

二十歳のときに体験した戦争を、歴史の断面を自分の身体で体験し、自分の未来への展望の中でそのことを見ていた——その同じ人が七十歳になって顧みたとき、その断面がより広い全体像の中で見えてくる。高齢人口が増えることによって、より広い視野で見る自我をもった人口が増すならば、知恵の蓄積も増すかもしれない。

戦後五十年のこの年に、OMEF 世界大会が開催される。皆さんの参加を切に望んでいる。世界の人たちと共に、子どもの幸せと保育の原点を考える時としたい。



(愛育養護学校)

# 子どもと共に生きる

阿部 なを

料理研究家、元人形作家、俳人、随筆家の阿部なをさんを、経営  
していらっしゃる「みちのく料理「北畔」」にお訪ねして、子育て  
について、また、梅雨時の料理についてのお話を伺いました。

(編集部)

料理は、話してもわからない事がいっぱいある  
の。頭でわかっていても、實際を、口でわからない  
とだめ。

ものを食べるってことは楽しいことよね。私は  
「食は無言の会話」って言ってるの。食材を選ぶ

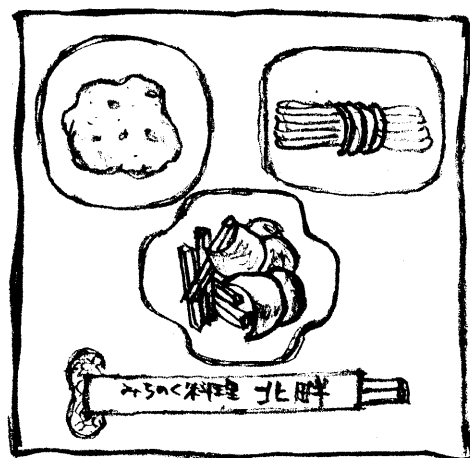
時、料理する時、食べる人の顔を思い浮かべて、食  
べる子どもを想って作るでしょう。どんなに忙しく  
ても、その位の余裕は持たなきゃだめよ。食材を見  
つめ、子どもを慈しむ心があれば、梅雨でも、盛夏  
でも、乗り越えられないものはないわよ。

〈早速、この三品を出して下さいました〉

⑥ “ゆかり”を入れた小豆<sup>あずき</sup>のあんこ。私は、小豆には酸っぱ味のあるゆかりを塩がわりに入れる習慣をつけるべきだと思うの。どう？

小豆は見なくても煮えるって言うのよ。細火でゆっくりポチポチ煮たつ程度で、一時間位かけておきなさい。これは市販のこしあんの粉末を混ぜて煮てあるの。そうすれば、いい小豆じゃなくてもいいでしょう。私は、一年中、小豆を煮てあるの。他のどんな豆よりも体にいいし、これがあると、パンにつけたり、卵焼きにくるんだりして、おやつにとっても便利なのよ。甘味はね、自分で、小豆一合に、砂糖一合と決めてしまえばいいの。それ以上甘いものは食べなくていいと決めてしまえばいいの。家庭料理ってそんなものよ。

それから、節分の豆は、一度煎ってあるからすぐ柔らかくなるので、とても便利です。また、ゆかりは、じゃが芋のマッシュや卵焼きの中に入れると、



⑤ 右上  
ブリッと辛い、ながーい  
切り干し大根甘酢漬け

「楽しい!!  
切らないで食べました!!」

④ 中央  
ゆり根の煮含めと  
チーズの梅肉和え

「きれい!! 手間を手間と思わ  
ない愛情を感じました。」

▲箸置きはカラ付きのピーナッツ

「料理と小皿、盆の色あいが伝え  
られないのが残念。」

大変、味が良くなります。

④ ゆり根は一般むきではないけれど、ゆり根を知らない子もいると思うので、何かの時に使ってみては。ゆり根をばらばらにして、きれいにしして、三分蒸すの。今日は、子ども向けだっていうからチーズの細切りと、グリーンピースもきれいなね。梅肉で和えて食べるの。どう？ 色もきれいでしょ？

和えものをむずかしがらないで、習慣になさい。子どもにはチーズをちょっと入れてやるとか、そういう余裕が大切ね。

⑤ 名古屋の守口大根の切干が手に入った時は、その長さを利用しない手はないと思いついたのです。守口切干が手に入ったら、普通の切干の様に切るのが勿体なくて。これは、ながーい切り干し大根をピリッと唐辛子をきかせて煮含めて、甘酢につけたもの。このように巻いてあるのよ。「この端から切らないで食べなさい」、って出すのよ。慌てると切れるの。子どもらを喜ばせることは、おいしい、

㊤左上  
ゆかりたっぶりの  
小豆あん

おいしい!!  
いくらでも食べられそう

まずいじゃないのよ。食卓にも、ユーモアが必要。楽しいじゃない。巻いて作るのは、けっこう大変だけれど、いいじゃない。子ども達がどんな風に食べるか想像しながら巻けば、楽しめるわよ。

六月は、お酢のものね。私は柑橘類をしぼって、ふんだんに使います。レモンを勢いよくバースとかけるのよ。味がほしーいじゃなくて、勢いがほしーいのね。そうすると料理が生き返るのよ。生きている酸は、どれ程、人を助けてくれるかってこと。

大人が梅雨時に食がすすまない時は、南蛮みそがいい。みその麴が有難い。麴は日本の宝。日本は麴の天国なのに、今の日本は麴の良さを知らなさすぎる。これは、物がありすぎる今の日本の悪い所ね。麴が、ふんわりと甘味を出してくれるでしょう。砂糖を入れなくても、柔らかい甘さをね。かつお節をゆっくり甘くして、唐辛子をいっぱい入れて辛くするの。その南蛮みそに、人参、豆などの野菜を漬けておいて、おかゆに入れると、食がすすむわよ。

私は、立派な料理はできないけれど、本当においしい料理、人の心にしむ料理を作ってるんですよ。子ども達には少々辛い南蛮は、ひかえても入れたものを食べさせていいと思います。

今の料理は飾りすぎ。野菜も、めちやくちやにいじくりすぎる。元のおいしさを忘れてる。プロの料理の先生の真似をしようとしましょう。家庭料理って、そうでなくていいでしょう。冷蔵庫の中の、ありあわせの材料で作る料理に、立派な名前な

なくていい。私は毎日、お店で余った豆腐を持って帰って、炒めものなどに入れるの。豆腐を加えるとフワッと柔らかくなって、いい家庭料理になるの。そういう料理に名前はない、でもそれで、なんともいえない柔らかさが出る、それが家庭の料理よ。簡単でいい、粗末でいいっていうと、人は変な顔をするけれど、心が入っているかどうかが大切ね。ぜいたくというのは、物があるかどうかではないと思うの。気持ちをぜいたくに持ちなさいと、私は言いたい。誰も持っていない心を持つことも、ぜいたくよ。私は毎朝、はこべを摘んできて食べているの。栄養があるし、太陽をいっぱい浴びているし、これは、何よりのぜいたくだと思ってるの。

私は、料理を習ったこともないし、料理の本を読んだこともないのよ。親の背中を見て育つんでしょ。ごはんを炊いて、おつゆを作る基本ができていれば、そして、素材と食べる人への愛があれば、何にも難しくないわよ、そして、自分から発想しよう



と思うことね。調味料も誰か他人の口で決めた量を  
大匙何杯なんて入れるのも、何分煮るとかいうのも  
変ね。自分の口で、辛かったらうすめればいいし、  
煮えたかどうか、自分でみればいいじゃない。人の  
規準でやらないとできない人が多いってことね。自  
分を持つこと。自分を知ること。自分を信じるこ  
と。

へお料理の話を伺っていると、子育てにも通じる事  
ばかりのように思えます」

そうね、子育てにも通じるわね。昔は知恵という  
より、知恵以前の本能を持っていたのね。今は、勉  
学とか知識とか、いろんな煩わしいものに縛られ  
て、本能が出てきにくくなっている。昔の人は、と  
にかく抱きとってやるとか、温ためてやるとか、  
持っているものは全部やったものでしょう。今は、  
抱きすぎるとよくないと言われると、いい塩梅だ、  
抱かなくていいなんて思ってしまふ。情報の氾濫の

中で、自分の判断をしないのね。自分で、情報を咀  
嚼して、自分で実行できる事と、できない事を判断  
しなきゃあだめよ。良い事の中にも、上手に自分に  
取り入れられない事はいっぱいあると思うの。自分  
を信じることよ。

子どもの育て方も、私の時代と今は違うし、子ど  
もを産むことと育てることは苦労じゃないなんて言  
えないけれど、その苦労は顔をしかめるような苦し  
さじゃあない。子どもに幸せにもしてもらえろし、  
たった今、とんでいってしまうような苦しきです  
よ。子どもの数も減って、昔みたいに兄弟姉妹の中  
で育つことも少なくなつて、親の負担が増えている  
けれど、もう一人の自分が大きくなるようなこと  
よ。子どもを育てるとするのは、おこがましいです  
よ。子どもに添っていくというのは、そりゃ、余裕  
がないとできないけれど、一つ心をひょっと変えれ  
ば、子どもは持って生まれたものがあるんだと教え  
られる。鼻をたらして泣いてばかりいる子が優しい

子だったりするじゃない。子どもが宝だっていうのは、そういう事が宝だっていうんじゃないの？

子どもの性格は皆違うでしょう。子どもは、性格をちゃんと持って生まれるんだから、親は子どもの性格に従わなきゃあね。親の思うようにはめこもうとするから、子どもがいうことをきかないと腹が立つのよ。その子は親のいうことをきけないものを持っているのよ。本性があるんだから。

子どもは自分の分身よ。欠点も長所も自分ないものは決して出てこないとわかることが大切ね。そうすれば腹が立つことも抑えられると思うの。子どもには、自分の血が分かれていて、自分の血にも別々のものが混じっているように、それぞれの子どもに別々の血が現われる訳でしょう。別々の子には、別々の愛で対してあげることね。いつも平均しいい子で生きてなくていいのよ。人にはバランスの悪さがあっていいでしょう。欠点の多い子でも、大切なものを必ず持っているでしょう。今は、その

子の持っている大切なものを見る事を忘れている時代ね。子どもは、よくわかっていると思うの。大人に対して上手に言えないだけだね。子どもにも子どもの哀しみがあるのよ。子どもは親と共存している。子は親のためになっているし、また、そのように育てなさいと私は言いたいわね。

今は、子育てもこうしなさい、ああしなさいと決めすぎですよ。子どもと老人には柔らかい物を食べさせなさいって言うけれど、おかしいと思うの。歯があるんでしょう？ 大人の食べているもので、子どもが食べてはいけないものってないでしょう？ 辛いものだって食べていいのよ。赤ちゃんの離乳食のびん詰めがあるでしょう。あれもあげてもいいの。でも、既製品に何か加えてほしいの、その親心を忘れてほしくないの。働くおかあさんに、あれもいけない、これもいけないとは言えないけれど少しだけ心が痛んでほしいのよ。自分で作るより栄養価が高いし、おいしいと言う人もいるけれど、体は丈



夫になっても、心はどうなるの？ 今の日本は心が薄いのかしらね。

子どもに対する忍耐ってすごいものでしょう。子どもに信頼してもらって大変なことよ。でもそうやって、親が子どもに育ててもらっている部分があるってことを忘れちゃいけないわね。子どもを育てるって幸せなことよ。人間らしく、幸せに生きさせ

るのは母親の仕事ね。

子どもを育てるのは、難しく物を考えないで、自然体でいいの。子どもと一緒に草摘みとかやってごらん。怠けることなく、自然に楽に生きよう。

最後に、六月の料理は長くおかないこと。一か月で悪い季節は終わるんだからね。六月は梅。梅肉エキスは、おいしいものじゃないけれど、具合が悪い時になると、体をもたせることができるの。薬の中で、体に悪くない薬は、梅肉エキス位だと私は思っています。

夏には、夏の気候にあった生活、過ごし方をしますよ。(談)

坂元彦太郎先生 追悼

岡山での坂元先生

秋山 和夫

先生は、岡山へは二回に亘ってご赴任されている。第一回は昭和十八年四月、岡山師範学校女子部長としてであり、昭和二十年十一月、大阪第一師範女子部長にご栄転になる二年余の期間。第二回は、文部省初等教育課長から、昭和二十四年六月、岡山大学教授、教育学部長（三十一年十月まで）として

のご着任である。昭和三十三年三月、お茶の水女子大学教授にご栄転になるまでの約九年間である。

昭和二十四年は新制大学の発足した年であり、新制大学の運営、内容の方向づけ、充実が求められていた時期である。一方、教育現場においては、新しい教育の方向、内容、指導法が模索されていた時期

でもあった。この時期に先生は、大学行政は勿論のこと、教育現場の指導にも情熱を燃やされた。

先生が教育現場の指導と関わって主張、実践されたことは次のようなことであった。新教育理論に基づく新しい学習指導法の確立、新教育科目である社会科教育の内容と指導法の樹立、視聴覚教育、へき地教育、特殊教育、幼稚園教育の普及、充実、定着などのお仕事であった。

私は、昭和二十七年三月大学を卒業して、当時の岡山大学教育学部長坂元彦太郎先生に就職のための面接を受けた。先生は開口一番「あなたは教育学を専攻されて教育のことがわかりますか」と質問された。教育学は教育の基本を支える学問であると信じて研鑽<sup>けんさん</sup>してきた私には、その質問は大きなショックであり、それに対してお答えすることができなかった。「小学生を教える決心がついたらご連絡して下さい」ということで面接が終わった。結局、岡山大学教育学部附属小学校へ教諭ということで採用

していただいた。その後何年かたって、先生のご質問の意味を私なりに把握することができた。

先生の官舎が附属学園のすぐそばにあったせいか、先生が初等教育をこよなく愛されたせい——恐らくその両方であったと思われる——附属小学校、幼稚園には、たびたび足を運ばれた。時には、附属小学校、幼稚園の教官の研究授業、保育を参観して下さい、いろいろと貴重なご教示をいただいたこともある。又、附属の教官室にもよく見えて、教官の質問に対しても気軽にお答え下さっていた姿、が眼に浮かぶようである。

幼稚園教育に限って言えば、昭和二十四年に設置された岡山大学教育学部に、同年から幼稚園教諭免許状取得のための課程認定を文部省に申請された。更に、岡山県立幼稚園教員養成所の設置を岡山県教育委員会に働きかけて、岡大教育学部が前面協力するという形で設置にこぎつけられた。実質的には、岡大教育学部に付設する形で運営され、その所長を

つとめられた。

また、第一回全国公立幼稚園研究大会を、岡山大学教育学部附属幼稚園と附属学園を会場として開催されたのも坂元先生であった。この会で「保育内容（特に自由遊び）について」と題する基調講演を先生御自らなされている。参加者は九百名で県外から三百名の参加を得ている。当時としては大変な盛況であったといえる。

先生はこれらの点について次のように述べられている。

「(岡山) 県下の幼稚園も戦前以上に復旧し、養成機関も、県立のものが大学内に設置されたり、岡山大学教育学部でも全国にさがけて卒業生に幼稚園教諭免許状の取得の道を開いたり、そういうことに関係を持ちながら、当時の幼稚園教育の振興にも関心をもった私であった」(坂元彦太郎『岡山の幼児

教育と私』『岡山県保育史』フレーベル館 昭和三十九年)

これは先生の控え目な追憶であるが、戦後岡山の幼稚園教育の振興、充実は先生のお力によるものが大きかった。

私は先生からいろいろと貴重なご教示をいただいたり、お叱りもいただいた。その中で教育とは何であるかを先生から様々な場面で教わったことは、現在の私の心の糧<sup>かた</sup>となっている。

本日、私は岡山大学停年退官に当たっての最終講義を行った。岡大の就職面接ではじめて先生におめにかかり、私の最終講義の夜、坂元先生をおしのびする文章をしたためているというのも、先生とのえにしの深さを思わざるを得ない。坂元先生有難うございました。先生のご冥福をお祈りいたしています。

(元・岡山大学)

# 坂元彦太郎先生を偲んで

村山 英子

去る二月四日、坂元彦太郎先生が亡くなられた。昨年は、「卒寿を迎えます」というお年賀状をいただき、ご長命をうれしく思ったのに、淋しいことである。

坂元先生は、岡山大学から、お茶の水女子大学の附属小学校の校長になられ、間もなく、附属幼稚園の園長を兼任された。幼稚園も小学校も、大学のキャンパスの内に隣り合わせにあるので、近くはあったが、毎日両方の間を往き来なさらねばならぬ

お忙しさの中、よく保育室や園庭に立ち寄られた。

当時、幼稚園は、菊池ふじの先生が教頭で、坂元・菊池時代が始まったわけであるが、私の長い教師生活の中で、この時代が一番幸せだった気がする。

言ってみれば、父親と母親が揃って健在で、大きな傘の下で守られているという感じなのである。

しかし、このお二人の関係も、初めからスムーズであったわけではないようで、菊池先生は、「いつも懷に辞表を入れているのよ」と、笑いながらも半

分本気で、おっしゃっていらしたし、私も、“親父とおふくろが、仲良くしてくださいと、娘たちが困ります。”などと、冗談まじりに申し上げたりした。ご聡明なお二人は、直に気持ちを通じ合われたのか、一歳年上の菊池先生を、冗談に“お姉ちゃま”などと呼ばれて、和やかな、よい雰囲気を作られた。

坂元先生は、よく保育室や園庭にみえられて、子どもたちと触れ合われたし、子どもたちも、園長先生が好きで、よくまつわりついたりしたが、先生は、カメラを持って、子どもたちの生活を撮っていらつしやることも多かった。保育者が園長先生の目をあまり気にしないでもすむように、という配慮もありだったのかとも思う。これらの写真は、附属幼稚園の九十周年の記念出版として、『お茶の水大附属幼稚園の生活―目でみる教育課程―』にまとめられているが、幼稚園の生活の様々な場面が、温かい目で写し出されている。

先生は、個々の子どもも、温かく見守ってくださった。三年保育のA子は、“早くおべんとうにならない”といっっては怒って部屋から出ていったり、帰りに“先頭になれない”といっっては並ばずに廊下にしやがみこんで怒っていたが、卒業の頃には、笑顔のよい、実のびのびした子どもになっていた。先生は、その三年間をじっと見ていてくださって「あの子は、とてもよい子になりましたね」とおっしゃってくださいました。保育者にとって、これ以上の喜びはなく、うれしい思いが今でもはっきり残っている。

毎年、子どもたちの卒業アルバムに、園長先生の“お言葉”として短い文章が載せられるが、坂元先生の“お言葉”に次のような文がある。

幼稚園の庭には

なにか　とくべつなおいがしていた  
なにか　とくべつな草がはえていた



とかげや ばったの

怪獣のようなのが いたし

ともだちも

チューリップや ばらの花のような

かおを していた

幼稚園の 思い出には

なにか 特別な においがする

坂元先生は、幼稚園のにおいを感じとられ愛された、数少ない園長先生のお一人でいらしたと、今しみじみ思う。

(元・お茶の水女子大学附属幼稚園)

## 坂元彦太郎先生を偲んで

立川 多恵子

平成七年二月四日の夕方、坂元彦太郎先生が亡く

なられた。私たちとしてはとても残念なことであるが、先生にとっては久しぶりに奥様に会える嬉しい

旅への門出なのかもしれない。

奥様が亡くなられたのは丁度一年前である。私は奥様の御葬儀の日、先生のお寂しさを察して、葬儀

時間の少し前にお宅に伺って先生をお見舞いした。先生はその時「この二、三日は何が何だか分からなかったが、やっぱり辛い……」と言われ、しばらくの沈黙があつて、「これも運命ですね」と自分に言い聞かせるように呟かれていた。

私は葬儀のあいだ中、先生が病床にあつて、急に旅立たれた奥様との最期のお別れもできなかったことを思い、涙がこみ上げてきた。

先生と奥様の出会いは先生が東大（当時の東京帝国大学）を出て、最初の赴任地である姫路師範に勤務された時期である。通勤の途上、向こうから人力車に乗ってくる女学生がいた。その人こそやがて先生の奥様になられる方だったのである。当時奥様は足の病気で人力車を使って通学していたといわれる。結婚して五十余年、お二人の間に六人（男二人、女四人）のお子様が生まれた。先生が病床に伏されてから、時折お宅をお訪ねする機会があつたが、御夫婦にお会いする度に、お二人の間にほのぼ

のとした愛の美しさを感じることができた。

終戦時、大阪の師範学校で教鞭を取っていらした先生は、わが国に民主主義教育を確立するために、囑望されて文部省の青少年教育課長として赴任された。当時東京には転入制限があり、先生は二年単身赴任の後、大家族を連れて、やむをえず千葉に居を求めたということだったが、その頃当地では食糧の確保もままならなかったらしい。

そうした厳しい社会情勢の中で、日本の新しい教育制度を打ち立てるため、先生は大変な努力をされた。現在、日本の教育界にすっかり定着している六・三・三・四制という教育制度の誕生は坂元先生の力によるところが大きいと思われる。

連合国に無条件降伏をした戦後の日本は、すべてマッカーサーの指揮する総司令部の指示のもとに動かざるを得ない状態だった。したがって先生の仕事も総司令部で教育を担当していたヘファナン女史の指導下にあつたといえよう。

「戦後の教育改革の仕事は担当課長として、さぞ大変だったことでしょ……」と伺ったことがあるが、先生は即座に「そんなことはない。あの仕事をしたことで、アメリカ女性の知性と優しさを知ることができた」と話しておられた。先生が日本の新生に大きな貢献をされたことは私も関係者にとって極めて誇らしいことである。齢四十二歳、当時の先生を知っている人は、日本にこんな英国風紳士がいたかと思えるほど颯爽としていたという。

幼児教育界における先生の業績も大きく、「幼稚園が戦後、学校体系の中に入ったのは私の努力もあったのです……」といわれたことがある。昭和三十九年に改正された幼稚園教育要領（現行の幼稚園教育要領の前のもの）は、岡山大学から、お茶の水女子大学に移られた先生を委員長としてまとめられたものである。

その当時の教育界は戦後の体験主義に基づく学校教育に対しての批判の声も強く、昭和三十一年版で

は幼稚園教育要領に六領域を登場させ、幼稚園教育の構造化を図った。しかしそれが災いして、幼稚園界では長い間領域が教科的に扱われるようになり関係者を悩ませていた。したがって三十九年の改正は、こうした幼稚園の教科主義を払拭するための改定でもあり、その重責を先生が引受けられたといえるよう。

たしかに三十九年版には、第二章内容の前文で、各領域は、小学校における教科とその性格が異なるものであることに留意しなければならないと明記されている。しかし先生は後日、やはり改定では三十九年版の六領域という言葉を工夫すべきだったと述懐されていた。

私が先生に初めてお会いしたのは、前任校の県立教員養成所の学生を連れてお茶の水女子大学附属幼稚園を見学した時のことである。当時先生は附属の幼稚園長を兼ねていらしたが、見学後学生たちを集めて幼稚園教育のことをいろいろ話して下さった

上、一つ一つの質問に丁寧に応じてくださったあの優しい目は今でも忘れられない。

その後私は、先生のお誘いを受けて幼児教育科のスタッフとして十文字短大に赴任した。そこで先生の管理者としての一面を見て、先生は管理者としての優秀さと、詩人としての優しさの両面を兼ね備えた稀なる存在であることを知った。ある時、私は無駄にも「先生の詩人の心はお嬢さんの影響が大きいです」と言いました。その言葉に先生は大きく

うなずいてくださった。

先生は私たちに子どもから学ぶことの大切さを伝えてくださったが、先生もまたご自分のお子様から、沢山の貴重な贈り物を受けられて、日本の教育界に大きな業績を残され、その九十一年の生涯を静かに閉じられたということが出来よう。ペンを置くに当たって先生のご冥福を心からお祈り申し上げたい。

(十文字学園女子短期大学)

## 思い出のひとこま

村田 修子

どんな人としても、必ずお別れするときがあることは知っているけれど、それを実感として受けとることはまずない。坂元先生にも何となく、いつでもお目に掛かれるような甘えた気持ちが自分のどこかにあった様に思う。

奥様が亡くなられてから、お邪魔してよいのかどうかを思い、以後はお目に掛かる機会を失ってしまったことをお詫びしたい気持ちでいっぱいである。「心から御冥福をお祈り致します」。

考えてみると、先生との触れ合いには何段階かがあったように思う。

まず、「文部省初等教育課長」になられたというときを機会に、お茶大附属稚園に多くの方々に囲まれた形で倉橋先生を尋ねてこられた。そのときは体を固くしてお迎えしたり、講演を壇の下でうかがうという触れ合い方に始まった。そこでは堂々となさった風格で、たいらに言えば、ご立派で周りが安心していられる雰囲気を漂わせていらしかった。

けれど、少し近より難いお役人風な感じも受けていた。

次に、お茶大の教授兼附属小学校の校長になられたので、以前よりはやわらかい空気のもとに接することができるようになった。特に幼児のことをよくご存知の先生には、幼・小の連絡については心温まる扱いをして頂き本当に有難く思ったものである。

その次には、附属幼稚園長を兼ねて頂いたのでお話をうかがうことも多くなり、先生が身近に感じられてきた。時折りは職員旅行にご一緒し、教育以外のことごとにも広い知識経験を持たれておられることに敬服もした。といっても時折りは反発し合ったこともある。けれど先生はなかなか負けては下さらなかった。

その後、坂元先生の前附属幼稚園長及川ふみ先生、二月二十五日九十六歳で亡くなられた内田安久先生のあとを受けて、洗足学園短大の幼児教育科長になられ、大変家庭的な感じのするなごやかな科風

を作ること尽力して下さった。

洗足学園で再び一緒することになったが、出勤日の関係で普段はなかなかお目に掛かる機会はなかった。時折り、帰りは同じ方向のため私の車に乗って下さって、お話ししながら混雑の道を退屈しないで帰ることができた。また時折りお尋ねし、奥様を交えて肩のこらないお話をよくした。特に卒園生の世界的なピアノスト内田光子さんの活躍振りの話のときは、目を輝かせておられたことが印象的であった。

二年ほど前の或るとき、お訪ねして玄関を開けたとき、沓脱ぎ石の上いつもの皮靴とはちがった白い運動靴が一足だけのっていた。そのときは「アッ」と思うと同時に胸が熱くなり、知らない間に涙がこぼれてしまった。先生は敏感な方、私のそれを思われたかどうか確かではないが、「この頃はあれを履いて散歩をするんだよ」とすぐおっしゃった。何気ない風だったが、この靴の印象は私にはとても

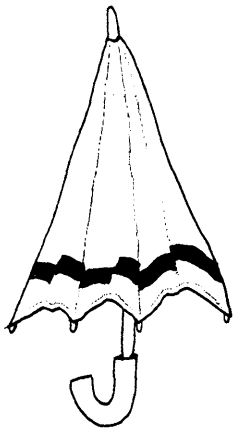
厳しかった。

二月四日（土）久し振りに車で洗足学園に行った帰り環状七号線を通った。「お近くにきたからお寄りしようかしら」とふと思っただけ、余り急なことなので今日はやめて次の機会にしようと思って環七を下りて家の方へ向かった。

先生は丁度その頃亡くなられた、とあとでうかがった。

先生いろいろ有難うございました。やさしかった奥様と天国でお幸せにお過ごし下さい。

（洗足学園短期大学）



# トポスにおける発達

## 第 2 回

無 藤 隆

トポス（場所）における発達という見方は、保育にあつては幼稚園という環境を分析することである。様々な角度から分析は可能だが、その一つに、園環境を物理的な配置との関連でとらえるものがある。建築学的な立場からの分析があるわけだが、我々も幼稚園を訪問しての印象からそのあり様を子どもからの関わり方としてとらえたことがある（無藤他『園は子どもの宇宙である』ミネルヴァ書房近刊）。本稿では、その本でのまとめを發展させる形で、とくに子どもの空間的な動きに注目して分析したい。子どもの物理的動きがトポスをどのように分節するのか、またトポスでのどのような動きを促すかによって物理的環境がいかに構成されるべきかである。

### 子どもの遊び環境

建築家の仙田満氏は長年の子どものための遊び環境の設計の経験から、子どもが生き生きと活動する

環境の持つべき条件として次のようにまとめている  
(仙田満『子どもと遊び―環境建築家の眼』岩波新書、一九九二、P.117)。

- (1) 循環機能があること
- (2) その循環(道)が、安全で変化に富んでいること
- (3) その中にシンボル性の高い、空間、場があること
- (4) その循環に「めまい」を体験できる部分があること
- (5) 近道(ショートサーキット)ができること
- (6) 循環した大きな広場、小さな広場等がとりついていること

(7) 全体がポラスな空間(自由に出入りできる穴が沢山開いているということ)で構成されていること

また、そういった理念を生かして設計した園での子どもの動きをこう記述している。「子どもはなぜか、すみっこ、はじっこが好きである。大勢で動きまわっているかと思えば、一人でじっとしていたい時もある。体が入るだけの小さな空間は胎内の記憶

か、子どもにとっては心地よいものである。曲がりくねった廊下、バルコニー、屋根裏、階段、舞台、橋、天窓を作った。

高い所、低い所、狭い所、広い所、明るい所、暗い所、柔らかい所、硬い所、さまざまに相反するところが子どもは好きなのである。従来、死角のない空間を作るというのが保育園の基本であった。この保育園では、死角がたくさんある。子どもたちにとっては保母さんから眼の届かないほうがおもしろい。」(P.96)

ここまで鮮やかに明解にいわれてしまうと、私(無藤)としては後何を足せるのだろうと思わざるを得ない。だがしかし、幼稚園の保育を常々見ている身としては同様の視点であれ、子どもが幼稚園という空間をいかなる形で動きまわるのかを検討したいと思う。それが子どもにとってのトポスを構成する基本となるからである。以下に、子どもの大きな動きという観点から幼稚園の空間を分類し、そ



の環境のありさまを眺めてみたい。

## 子どもの動線

子どもは幼稚園の空間をどのように動き回るのか。その動きの基本は、仙田氏の言うように、循環ということにあるらしい。子どもはゆったり落ち着いて何かしたいこともあるし、動き回りたいこともある。体を動かす際には明確なルールがあるスポーツをするというのがもっと大きな年齢の子どもの発想だろうが、幼児は必ずしもそうではない。単に走り回り、動き回るのである。また、出発点と終着点と同じである動きを好む。そうすれば、繰り返してきくからであらうか。あるいは、出発点と異なる目的地のイメージを思い浮かべるのが難しいからであらうか。元に戻ると言ってもまったく同じ道をただ逆行するのはつまらない。前進しつつ元に戻りたいのである。絶えず回転したり曲がったりすること、は、体感と視界の変化をもたらし、それも単調な動

きから救ってくれる。

走りながら回ることもあるが、ぶらぶらと回る場合もある。その場合には、周りを見回しながら、何か面白いことが探しているようである。「回遊」とでも呼べるようなこの動きは、ぐるぐる回るのが楽しみつつ、やってみたいことがあれば、それを取り入れたり、加わったりしようとしているのである。幼稚園の自由遊びの時間では、様々な活動が並行している。子どもはその間を動きながら、随時互いに交渉を持ったり、離合集散を繰り返す。回る動きは園環境全体を結び付け、その各々のコーナーでなされている活動の間に結びつきを作り出す。循環にせよ、回遊にせよ、何もない空間をめぐるのではない。均一な陸上のトラックのような場を回るのではなく、コーナーや活動の「島」を次々に渡っていくのである。各々の島の周りの光景もここにある物・人も変化する。思いがけないものに出会う動きである。幼児が十分に空間を表象し、記憶し

きれないことの効用なのであろうか。また、絶えざる活動から短い時間にも各々の島のあり方が変わることも確かである。

回らなくてある場所でじっと活動している場合でも、周りが見えたり、見えなかったり、交渉が可能であったり、断絶したりすることは大事なことだ。

友だちと交流もできるし、遮断して自分達だけで遊べるようにもしたい。視線や交渉もまた子どもの動きとして重要な要素である。例えば、ある時間数名の子どもがごっこ遊びをしているとして、遊びが成り立つためには周りからの邪魔が入っては困る。しかし同時に、そのグループだけ孤立しては、発展の機会を失いやすい。ときどき、外の子どもが仲間に入ってきたり、一時的な仲間（「お客さん」としてお店に買物に来るとか）になったりした方が遊びに変化が出る。うまく行く場合には、ごっこの筋書きが複雑に発展する。飽きてきたときに周りを見回して、そちらに移ることもよくなされる。周り

でやっていることを自分たちの遊びに取り入れ、面白くする場合もあるだろう。

この交流と遮断の関係は、時間のリズムを空間化することでもある。ある時間、一つの遊びに熱中する。その間は、邪魔が入らない方がよい。飽きてきたり停滞したら、外の刺激が必要になる。そこでは、交流が可能でないと困る。その交替は、遊びにより年齢により子どもの個性により異なるが、一つの遊びの多くは一〇〜二〇分程度続いて、そこで何か刺激がないと、終わってしまうだろう。別な遊びに移ることになる。刺激が入ってきた場合に、遊びは独自の総合化されたものと発展するだろう。そして再び、自分たちの遊びに集中することになる。

回る場合でも、籠もる場合でも、その最も極端な形が、隠れて出てくるとか、隠れているといった場合だろう。回っていくときに、ある所から次の所に飛び出して変化があり、新たなものが眼に入るところで面白くなる。ある場所で集中するなら、周りか

ら完全に遮断されて隠れる形が最も都合がよい。隠れる場合に、誰からも見られないで視線をも断ち切るのだが、それは、単に集中することを越えて、他者から逃れ、外の環境から離れ、自分たちだけの世界を作る意志であるように見える。世界は今見えている壁なり大型積み木なり机の裏で限られているのである。外のことは忘れてよい。他の人間も自分たちを忘れているかのようだ。幼稚園という集団の場で長く過ごし、遊ぶには、このような隠れる場を必



要とするのだろう。そこには、隠れてほっとする場合と、自分たちの独自の遊びを発展させ、力を確認したい場合とが含まれている。

隠れて視線を遮るのは逆に、他者を全体として見渡す動きもある。見渡すのに都合のよいのは、滑り台やジャングルジムの上、二階や階段から大勢が遊んでいる要素を見る場合である。しょっちゅうそんなことをするわけではないが、たまにそのように眺めている子どもを見ることがある。眺めないまでも、そのような場所を通る際にちらと眼をやって、降りてから仲間に入ろうと走り寄る場合もある。そうまでしなくても、何となくいろいろな遊びをしているのが眼に入るだろう。そばでやっているのを見て分かるのと違って、全体像の中での動きが分かるのが特徴的だ。

上下の視線の動き自体が不思議さをもたらす。ジャングルジムをほんのわずかがっただけで、随分周りの光景が違って見える。地面にいたときには

友だちの顔しか見えなかったし、誰かがいればその向こう側は見えなかった。その数人だけの範囲であった。それが二段も上があれば、急に庭全体が見渡される。友だちの姿が斜め上から見え、しかも大勢がまとまっている。その向こうには別な友だちや先生が別な遊びをしているのである。

### つなぐ場の意味

回り移動する際に、肝心の遊びをする場所以外にその間をつなぐところがある。多くの場合には単に急いで次の場所に移るだけのことではないが、時にその場所が独自の魅力を持って、そこならではの遊びを誘い出すことがある。遊ぶ場所ではないから、園で遊ぶのを禁止されていたり、移動の邪魔になつて落ち着いて遊べなかったりして、普通は遊んだりはしない。だが、場合によっては、遊んでよかったり、かえって誰も来なかったりするの、自分たちで内緒で遊ぶのに都合がよい。大体は変な形

をしている空間なので、それを利用して違う遊びが出来る。

廊下や階段はそこで遊ぶのは危ないが、それを別とすれば、面白い場所である。廊下は細長い形で、所々に出入りできるようになっている。何かを移動させたり、ものを投げたりすると楽しい。急いで走ったり、すべったりもできる。階段はいちいち段を上がるのは面倒だが、小さい子どもはそこに魅力を感じる。段の登り降りが楽しいのは相当地に小さいうちだけだが、段を利用してじゃんけんなどで遊ぶのは幼児もよくやることだ。踊り場で休んだり、向きを変えたりするのもよい点だ。そういったことと無関係に、ごっこ遊びなどの場に変えている場合もある。

建物をつなぐ回廊や玄関、出入口なども面白い。エアポケットのように誰の注意もいかないうちで、子どもが隠れて何かを出来るところだ。出入りすることで遊びとすることもある。

廊下などつなぐ場合はしばしば展示の場所にもなる。回覧物やニュース、子どもたちの作品の展示である。それを所在なげに見ている子どももいる。展示はもちろん保育室の壁面がそのためにある。安全に支障のない範囲で、出来る限り子どもにとって「濃い」体験を用意することが園環境の基本である。だから、たとえ移動の場に過ぎなくてもそこで見ることの出来るものを置いておくこと、それも随時入れ換えて子どもの注意を常に引きつける努力が必要だ。子どもの自然の動きをいかに意味あるものにするかである（なお、本稿の趣旨から外れるが、子どもの作品をいかに展示するか、高度な文化的な作品をいかに示し日常化するか、その展示の運営にいかにか子どもを巻き込むかは大事な保育のポイントである）。

## 外に広がる空間

園は幼稚園として閉ざされているのではない。通

園や園外保育があるが、それは別な機会に論じるとして、少なくとも園から見える光景がある。日本の庭園の伝統にあるような借景という大げさだが、似たようなことはどの園にもある。

子どもは、窓と塀から外を見ている。そこにきれいな景色が見えることもある。道路を走っている自動車や、線路を走る電車が見えることもある。隣の公園の樹々がそそり立っていることもある。屋上があつて、遠くの景色が見事に見える園もある。遠くに見える高層ビルや山々、近くに自分が住んでいるマンションが見える。そんなことを話している子どもたちを見かけることがある。

外を見ると言えば、何より空が見えるのだ。季節と天候に応じて様々な姿を見せてくれる。その青さ、白い行き過ぎる雲、暗く重い雨雲。もっとも、そこに眼を止めて、意識を向けられる子どもは少ない。子どもにとってあまりに当たり前の背景に過ぎず、気が付きにくい。子どもの視線は下には向く

が、上には向きにくいのだ。地と空を対比できたり、地から空へと伸びるもの（樹や塔など）があると、視線がそれに沿って伸びて行き、それへと広がる。その工夫が園環境の中で必要なのである。

そういった広い光景への関わりのもう一つは風である。風は遠くから吹いてきて、遠くに去る。眼に見えないが、樹々や服をそよがせ、涼しさや寒さをもたらす。人工的な冷暖房に慣れすぎて、風を感じる機会がめったにない現代では、改めて風への関わりをいかに園の保育の中で取り組むかを考える必要がある。風の強い日に風と遊び、風に畏れを感じる体験が望まれるように思う。

同様に、空とは別に陽の動きを感じとることをいかに考えたらいいか。暖かさや暑さを感じる。影の長さや光の投ずる角度から光の動きを感じる。例えば、一日の光の変化、季節による陽の高さを投ずる光の角度などをどう子どもに実感できるようにするか。科学的理解以前に驚きと興味を持ち、変化に気

づくことが大事なのである。

### 運動、作業、休息する空間

空間のあり方を考えるとき、その空間で主にする活動から分類し、検討できる。その際、少なくとも運動し走る所、跳んだりする所などは独自の空間を必要とする。活動の作業に応じて、例えば、組み立てたり、取り組んだりするには、空間の広さと備品や道具が必要となる。休む場として、おしゃべりしたり、絵本を眺めたり、先生や職員のそばにいたりする所が役立つ。活動からちょっと離れて、ほっとする場である

（お茶の水女子大学）

## 保育環境について考える(1)

原口 純子

教育要領が改訂されて六年を過ぎようとしています。

す。保育は従来の活動を中心とした考え方から、環境を通して行う教育へと変わりました。しかし、この発想の転換がなかなかむずかしいことが、末端の現場の実態を通してわかります。

平成元年の告示から、文部省の中央研修、県の伝達講習、文部省の先生方の地方講演会、文部省指定園の教育課程研修会、県の指導方針説明会、各園を回っての計画訪問指導とあらゆる手をつくしてご指

導いただいているのです。

しかし、同じ事を何度説明されても、環境を通して行う教育というものを具体的にイメージが持てない人には、混乱こそすれ、どうしていいかわからないのです。

とりわけ「教師は活動を直接的に与えるのではなく幼児がそうした活動をしたくなるような環境づくりをするわけです」、と言われると、手も足も出せない気持ちになるのです。なにしろこれまで毎日、

「明日何をさせようかしら」と考えていたのですから。簡単に言えば、「活動ぬきに保育など考えられない」という感じではなかったでしょうか。しかし、これまでの保育のあり方を考え直すきっかけとなり、公立のA園は運動会に鼓笛隊を毎年やっていたのですが、取りやめになりました。また、別のB園では、毎日十時まで自由遊び、一斉片付けの後、室内で出席点呼、朝の歌、課題活動をしていたのを、取りやめて、朝から一日中を自由に遊ばせることにしました。

### 乏しい環境おまかせ保育

B園の先生は活動を与えるのを止めて、環境に保育をおまかせすることにしたのです。「うちの子どもは外遊びが大好きです、特にドッジボールが盛んです」との主任の先生の説明です。

なるほど、日本の幼稚園には設置基準があるのですが、どんな幼稚園でも、外遊びには様々な遊具や遊

べる環境が、結構、整っているのです。

ぶらんこ、すべり台、ジャングルジム、鉄棒等の固定遊具や、砂場、水道の水があります。砂場セツト、スクーターや箱車が倉庫に入っているし、園庭の周りには椿の花やほこべ、白ツメクサがはえているし、飼育小屋にはうさぎが三匹います。広いグラウンドでは昨年、年長児がドッジボールをしていたのを知っているので、自分達で白線の枠を描いて、ドッジボールをしたり、サッカーゴールを出して、サッカーを自分達で始めることができるのです。外で幼児は環境にかかわってこれまでもかなり自主的に遊んでいたのです。

一方室内ではどうでしょうか。これまで十時から「おあつまり」と幼児を集めて課題活動をしていたのです。

B園の幼児が主体的にかかわることができる保育室の環境は、机、椅子、ままごとコーナー、人形やままごとセット、プラスチックのブロック類、個人

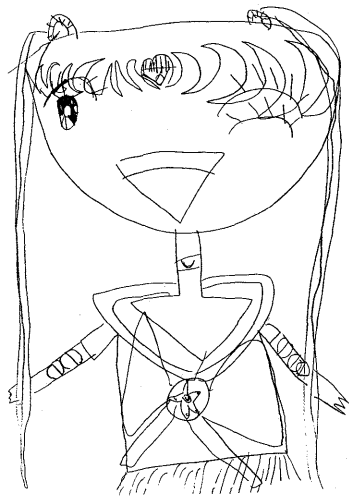


持ちの自由画帳、クレヨン、水性マーカー、はさみ、粘土、粘土ペラ、粘土板、のり等が個人のロッカーのお道具箱にはいっています。テーブルの上のかごに色紙（折り紙）二十枚位、飛行機等を作る広告紙のたば、窓際の出窓に金魚やザリガニの飼育箱、壁際の絵本箱に月刊保育絵本や他の絵本が十冊、その他幼児用テープレコーダー、園児が家庭から持ち寄る空き箱、廃材が入っているコンテナ、接着に用いるセロハンテープや布テープ類、わりばしやストロー、紙テープや布リボンなどです。

これらの環境や教材で生活する幼児の遊びを見ると、典型的な例は次のとおりです。

保育室に真ん中は空間をとり、端の方に机が二個ほど出してある。机の上にはなにも出ていない。幼児は登園してカバンを片付け、出席ノートにシールを貼ると外にとびだす。幼児が外遊びをせざるを得ない環境が整っているのです。外で遊びたくない幼児は個人ロッカーから粘土やクレヨンを持ち出し、

◀キャラクターものの絵を描く子が多い



粘土をする、絵を描く（セーラームーン等のキャラクターものや、ファミコンものの絵が多い）、男児数人がブロックで武器やロボットを作って、戦いごっこをして廊下や室内を走り回る。

テーブルで女児が折り紙でヤッコさんやパッチンカメラをいくつも作る。

女児がテープレコーダーを自分たちで持ち出し、ビニール紐で作ったボンボンを持ってセーラーマウンを踊る。

幼児の室内遊びの環境は乏しく貧弱なものが多いのです。これは保育を食事に例えると、ごはん、味噌汁、ふりかけ、つけもので済ませているようなもので、栄養が悪くて伸び盛りの幼児の成長をささえることは到底できないのです。

それでは一体この保育の計画はどうなっているかと、週の保育案を見ると、例えば四歳の二月ですと、

ねらい・好きな遊びのなかで、いろいろイメージをわかせて遊ぶ

内容・つくったり、遊んだりするなかで、いろいろにイメージをわかす

・友だちに思いを伝えたり、友達の思いに気づいたりして遊びを楽しむ

ねらいも内容ももっともらしくできているので

す。環境は一年中乏しいが、ねらいや内容は時期に応じて変化していくのです。

四月頃は、

ねらい・自分の好きな場を選んだり、先生や友達と一緒に遊ぶことを楽しむ

内容・安心できる場や遊びを見つけてかわろうとする

同じ環境でも幼児はそれなりに育っていくので、教師のかかわり方やねらい、内容が変わることになるのです。

ある日幼児が室内で落ち着いて遊んでいると思うと、その日は豆まき用の豆入れ箱を作る日で、朝、登園した幼児から画用紙で、箱作りをしていたのです。飽き飽きするような毎日に新しい教材が出ていたのです。幼児が主体的に環境にとりかかって自主性を育てる保育も、昔ながらの行事の課題活動に支えられていることになるのです。

## 保育室の物的環境を吟味する

環境を通しての教育では、環境が物だけではない事が強調されています。ともすると物だけをそろえれば良いとか、物の環境に保育をおまかせしてしまう危険や危惧があるからです。もとより環境は自然の環境も人的環境も、近隣の社会的環境もとても大切です。けれども毎日生活する保育室の環境は細心の心配りが必要です。教師の髪型から服装などもそうですが、どんな物が保育室に置いてあるかは、直接その日の幼児の遊びを方向づけます。乏しい保育室では乏しい経験しか持たせられません。

樋口正春氏が外国の幼稚園の保育室に比べてあまりに貧弱な日本の保育室の環境を指摘され、*「おもちゃも何もない部屋で子どもに遊びなさいと言うのは、「根性で遊べ」といっているのと同じことです」*<sup>〔注〕</sup>と書いておられますが、同感に思います。

### (1) 個人持ちの教材

環境を通して行う教育に変わっても、身近な保育

室そのものが、課題活動時代のままになっている所が多いのです。

個人持ちの教材は全員が一斉に課題活動をする時には必要であつたが、環境にかかわって主体的に遊ぶと言う時には都合が悪いのです。言うなれば環境がロッカーにしまつてあるようなものです。

特に幼児は目の前の物に触発されることが多いのですから、「個人持ちにした方が片付けが楽だ」などというそまつな教師側の理由で、教材の有り様を決めてはいけません。絵を画くコーナーや粘土をするコーナーがあれば、「ぼくもしたい」「絵かきたい」とよってきます。

クレヨンもはさみも、粘土、粘土板、粘土ペラなども、みんなオープンにして、だれでもが使えるようにし、片付け等は、それなりに幼児と考えればよいのです。

環境で育てようとするならば、それなりに栄養価の高いというか、幼児が自然に遊ぶ中で十分に成長

を支えられるだけの物やかかわりが必要なのです。

## (2) ブロック類

プラスチックのブロック類はこの保育室の中にもあります。

色がついている、壊れにくい、一人でも何人でも遊べる、構成遊具として平面でも立体でも遊べる、管理がしやすい、危険が少ない、等優れた面も多いのですが、遊んでいる実態は男児がロボットを作ったり、武器を作ってダダダッと人を撃つまねをしたり、戦ったり追いかけて駆け回る遊びが多いのです。保育室に置いておけば年少の四月でも年長児でも遊びます。従って、これは、幼児の育ちを見て、どの時期に片付けるかの見極めが必要です。

## (3) 折り紙や空き箱 その他

折り紙や空き箱は手軽に手に入る極めてイージーな教材です。どの時期に何を育てたいから置いているという理由なしに、置いておけば遊ぶという安易な出し方をやめなければ、幼児は別の遊びを経験す

る機会を失います。好きで折り紙や空き箱をしているというより、他に何もやりたいものが見つからないからやむなくやっていることもあります。

## 物の環境にこだわる

すっかりマンネリ化している保育環境は、担任の教師のせいとばかりはいえません。保育のビジョンを持ち、育てたい幼児像を持ち、教育課程を組み、教師を指導し予算を持って運営に当たっているのは他ならぬ園長なのです。幼児にとって最も大きい意味での環境は園長かもしれません。

かつてある幼稚園を見学した時に、廊下の書棚がディズニーや日本昔話などのビデオテープと紙芝居と折り紙でいっぱいになっているを見て、この園が何を大切に思っているか予算を使ってきたかがわかりました。

さて、私は前年度の予算で、木製のレンガ積み木（三・三 cmを一辺の基尺とし、縦横の比率一・二）



▶レンガ積み木で遊ぶ

や木の動物、様々なバズルやゲームを購入し、幼児のままごとコーナーにはPTAのお母さんをお願いしてウォドルフの手作り人形を入れてみました。

#### ＊木製のレンガ積み木

手触りのよさ、自然な色、安全性、積んだりくずしたりする楽しさ、一人でも何人でも遊べること等、木製の動物と合わせて楽しいコーナーとなつて

います。

積み木と言えば近頃大型箱積み木や、ウレタンのカラー積み木等が中心で、小型の小さな積み木は忘れられていたように思います。

ブロックというのは崩れない良さがあるのですが、逆に砂同様、レンガ積み木は崩れる良さを感じます。やたらに武器を作つて駆け回ることもないし、小型積み木には他のものが越えられない良さを感じます。

#### ＊バズル・ゲーム

遊びのコーナーのバズルやゲームを充実させてみました。オセロ、ジグソーパズル、カルタ、トランプ、コリントゲームなどは以前にもあったのですが、ロバの荷物や、メモリー等、何人でも遊べてルールのやさしい遊びは幼児に適したものと言えましょう。

特にロバの荷物は荷物の薪を人数分配りロバの荷台に一本ずつ載せるのですが、指先に神経を集中さ



▶ゲーム「ロバの荷物」

せて真剣に薪を載せるのです。薪を落とした人は落ちた薪をもらいます。早く薪のなくなった人の勝ちです。

ゲームのよさは、人間関係の平等性にあると思います。ごっこ遊びも、外遊びも人間関係の力に振り

回されやすいのです。お母さんにならない幼児、赤ちゃんや犬にばかりさせられる幼児、縄跳びの縄ばかりまわしている幼児等、遊びの人間関係は厳しいのです。ゲームはルールや順番があつて、関係が平等に保てるのです。遊びに入りにくい幼児や弱い幼児も楽しめます。

#### ＊ウォドルフのぬいぐるみ人形

シュタイナー教育思想を背景に生まれた人形と言われるこの人形は、中身に特に弾力性のある羊毛がしっかりと詰められていて、適度の重さと弾力性があり、洗う事もできるすぐれものです。むつくりふとっていて、目も口もそれとわかる程度に小さくついています。細くて美人のリカちゃん人形とは対の極にあるような抱き人形です。

クラスではみんなで名前を付けて、クラスのメンバーとしてかわいがります。着せかえになっており、パジャマやお出掛けと着せ替えたり手をかけて遊び、散歩にも連れて行き、プールもいっしょに入

◀ お手製のウォルドルフのぬいぐるみ



れて遊んでしまいます。幼児の分身のような人形で  
す。

まとめ

幼児が毎日生活をする保育室の中の物の環境を考  
えてみました。どんなに物のない貧弱な環境でも、  
幼児は文句も不平もいけません。部屋がつまらなけ  
れば、さっさと外遊びに出掛けます。本当にドッジ  
ボールばかりが好きだったのでしょうか。大人はエ  
ネルギーをかけて情報を集めて、幼児が「やってみ  
たい」「ほくも」と言えるような美しく、確かな環  
境を整えなければならぬのです。

けなげで、いとおしい子たちのために。

(茨城県公立幼稚園)

〈注〉

『げ・ん・き』No.21 エイデル研究所「援助する保育に  
おけるおもちゃの役割」P.79

## 話すこと・聞くこと

松井 とし

研究会などで与えられたテーマについて話し合いを深める時、小グループになってバズ・セッションすることがいろいろな場で取り入れられ、定着した感がある。だが、いざ話し始めると思いが先に立つのか話が長くなり、最終的に話し手自身にも話したいことが何であったのかよく分からなくなってしまうたりすることがある。また司会者や記録者の聞きとり方によっては、分科会から全体会へ返す内容がグループ内の話し合い全体の流れや主旨を反映していないこともある。

保育者としては子どもたちの「話す・聞く」機会を大切にし、環境づくりに心を砕いている私たちが、さて自分たちのこととなるとあまりにも日常的なこととして、「話すこと」や「聞くこと」を安易に考えてしまっていないだろうか？ 従来の教育では教え込む教育が基本であったために、対話とか討論とかに重点がおかれていなかった、そのため自



分の考えていることを簡潔にかつ正確に表現することが苦手だ、とする指摘がある。

豊かな人間関係をつくり出し、楽しく学校生活に取り組めるようになることを目指して、H市の小学校では「話す・聞く」のロールプレイを試みた。低学年の子どもたちも歌遊びや身体表現、ゲーム等のウォーミングアップの後、二人一組でテーマについて三分から五分「話す役割」「聞く役割」を取り、話し合う。相手の気持ちになって聞くこと、相手をからかったり否定したりしないことを努力目標として話を聞いた後、聞き手と話し手の役割を交代する。このロールプレイをした後、子どもたちは『私の話をよく聞いてくれたので安心した』『話す時に緊張した』『いつもと違う人と話せた』『いろいろな考えがあって楽しい時間だった』『相手から聞いたことがうまく伝えられるか心配だったが、ここにこしてくれたので良かった』などと感想を述べている。

自分の考えをまとめ、相手によく分かるように話すことは難しい。保護者からの相談に応じるときの基本のあり方、「傾聴」はさらに難しい。教師と言われる人たちはまことに聴き下手で、一〇分間と黙って聞いていられないのだそうだ。良き話し手、良き聴き手となるために、さらに保育者としての感性を高めるために、園内研修等で「話すことと、聴くこと」に正面から取り組むことが必要なのではないだろうか。

# 保育実践のバイオニア

うじはらちよう

## 氏原 鋳 (2)

守 隨 香

模範幼稚園で氏原が実践した保育の内容と目的は、東京女子師範学校附属幼稚園（以下、附属幼稚園とする）とほぼ同じだった。教材や研究方法も、保育見習いで学んだことを生かしている。だが、附属幼稚園とは地域も事情も異なる幼稚園だし、立場も見習い生と保姆では違うのだから、苦心もまた別なものがあったはずだ。

第一に、次頁の表に示したとおり、氏原一人が担

当した幼児数が違う。模範幼稚園が開園してまもない頃は見習い生時代に比べて少ない幼児数であったから、附属幼稚園で学んだことを実践で再検討し吟味して、自らの実践を築いていく余裕があっただろう。けれども一八八一年（明治十四年）になると入園者が増えたため、他に例をみないほど多くの幼児を受けもつことになった。開園以来積み重ねてきた実践を、もう一度検討し直す必要に迫られることも

あつただろう。

第二に、かよっている幼児の家庭環境が違ふ。附属幼稚園ははからずも、富裕家庭の子弟が集まる貴

保育見習い生時代 (附属幼稚園)		40.3人以下 ①
模範 幼稚園	明治12年	24.0人 ②
	14年	57.5人 ③

▲氏原の担当した幼児数の変遷

族的な幼稚園となつていた。新規の事業や精神を開拓した場合、いち早く取り入れる（または取り入れることができる）のは、経済的・文化的に上層の者であることが多いものだ。その点模範幼稚園は、保育料を無料にしたために、より早く一般庶民に受け入れられ、たくさんの方々が、我が子を幼稚園に入れることができるようになった。開園した一八七九年（明治十二年）に四十八名であつた幼児が、二年後には百十五名にまで増えたのもそのためだろう。財政の苦しかった大阪府で、保育料をとらない方針を強行したところに、氏原の考えの一つをうかがい知ることができる。幼稚園が、上流階級のための贅沢な教育機関だと思われ、庶民の生活から離れてしまうことに抵抗を感じたのだろう。より広い普及と発展をねがうなら、保育料が負担にならないという条件こそ、具体的かつ庶民に最も強く訴える方法だからである。だとすればそれは、附属幼稚園のあり方に対する問題意識を表しているともいえる。

保育内容は、午前中は主に恩物を使った課業で、午後は自由あそびというのが日課であった。時間割をみると、恩物の名称に附属幼稚園とは一部違う書き方がされてある。附属幼稚園では「織紙」と「畳紙」が別々の子目となっているが、模範幼稚園ではこの二子目を合わせて「織紙畳紙」とし、「剪紙」と「木箸細工」も同様に「剪紙木箸細工」として扱っている。類似の子目をまとめたのだ。<sup>④</sup> 附属幼稚園の保育をただ盲目的に再現するのではなく、自分なりの考えで工夫をし、実践しているのがわかる。

模範幼稚園は、保育実践の点では全く順調だったのに、大阪府の財政難が原因で廃園されることになってしまった。渡辺昇が知事職をおりたことで、幼稚園の理解者を欠いた結果でもあった。しかし、幼児の父母の中から七名の資産家が、幼稚園を続けるための出資を申し出てくれたおかげで、私立中洲幼稚園として九死に一生を得たのである。氏原は模範幼稚園が廃園した原因を真摯に受けとめ、保育上

の研究・改良だけでなく、経営上の方策にも心をくだいての再スタートとなった。一人二十五錢ずつ保育料をとり、小使を雇うのもやめて事務・雑務までを保姆がやることにしたのだ。教材も、金銭をかけないよう、自然物を利用したあそびを考え出していった。<sup>⑤</sup>

一八八四年（明治十七年）、中洲幼稚園はわずか六か月で廃園した。廃園といっても、大阪市北区が譲り受けて公立北区幼稚園にかわったのだ。氏原は、唱歌教材として小学唱歌集を取り入れ、西洋風の曲と現代語による歌詞の唱歌で保育している。楽譜を読むのにかなりの訓練がいったはずだ。またこの時期は、幼稚園増加に伴って保姆の需要も増したため、保姆養成が急務とされていた。そこで北区幼稚園でも保姆見習い生をおいて、積極的に保姆を養成している。我が国最初の保姆養成教育を受けた氏原は、この時既に、大阪の幼稚園発展に欠くことのできない人物となっていたことがわかる。

北区幼稚園が開園して九年がたった一八九一年二月、翌月までで廃園することを北区会が決定した。

一年ほど前から、保姆養成の必要性が認められなくなってきた、廃園の予告はされていたものの、氏原には無念なことだった。幼稚園の必要性ではなく、保姆養成の必要性がなくなったことが原因で北区幼稚園が廃園になるということは、北区幼稚園が、よほど保姆養成教育に力を入れ、社会的にも保姆養成の現場という認識が強かったと思われる。この時氏は、幼稚園を続けられるように取りはかってもらおうと町会議員の家を一軒一軒回っている。品格を守って育った氏原が、これほど低姿勢で人に請願するのは初めてだった。家庭教育で培われた強靱な忍耐力と教職の誇りが、氏原の志を支えたに違いない。氏原の努力は実を結び、公立西天満幼稚園が開設された。

北区幼稚園時代に氏原は、『京阪神連合保育会雑誌』にたびたび投稿した。その中には、既作の唱歌

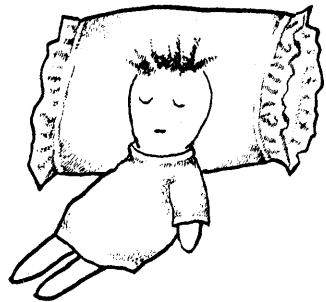
が幼児の保育にふさわしくなければ、保姆が改作して用いるよう、呼びかけているものもある。また、改良作品を誌上公開することで、一保姆の試みから多くの保姆が学び合うようにすべきだと書いたものもある。<sup>⑦</sup>そして氏原が実際に、既作の譜をもとに作詞した歌詞を発表しているのだ。創造的な保育を自ら実践し、より多くの保姆たちに研究の模範を示す氏原の向上心と使命感が伝わってくる。この西天満幼稚園に勤務した九年間を最後に、氏原は保姆の地位を退いた。

一九〇二年から一九〇九年まで氏原は、大阪府女子師範学校に勤めた。教員心得としてフレーベルの保育理論を講義する一方、同校附属幼稚園の上席保姆をも兼任した。<sup>⑧</sup>氏原は以前、幼稚園で必ず見習い保姆をおいた。多くの保姆を養成して、大阪の幼稚園発展に内側から寄与してきた。けれど見習いは、制度として定着していなかったため持続しないことが多かったという。見習い生自身が見習いを続ける

意志をもちにくかったのか、あるいは養成する幼稚園側になにか問題があったのかはわからない。また本来幼稚園は、幼児の保育を意図するところであるから、保母養成教育の場としては十分な設備環境でなかったはずだ。その点、大阪女子師範学校は教員養成校だから、氏原の保母養成力を十分に発揮することができたと思われる。

以上が、帰阪した氏原が保母として、また教員として歴任した幼稚園および学校での教職生活である。

ところで大阪市は一八九七年に大阪市保育会をつくり、保育法の研究・改良をしてきた。後の京阪神三市連合保育会の母体である。研究を活発に交換し合って、関西地方に幼稚園の文化を築いたといえる。氏原は北区代表の委員や『京阪神三市連合保育会雑誌』の編集・発行といった形で会に貢献した。一九〇二年四月に開かれた大阪市保育会総集会において、氏原は保母の服装取調委員の委員長に選ば



れ、<sup>⑨</sup>その調査結果を同年十一月に発表している。<sup>⑩</sup>それによると、氏原ら取調委員の出した保母にふさわしい服装は、袴と筒袖ということらしい。どちらも動きやすさと経済性を重視した結果である。ただし

筒袖の方は、着る人によって下品にもなるけれど、それも、見慣れば少しずつ良くなっていくだろうと述べている。経済的で華美にならない服装に保姆の品格を求め、袴と筒袖がそれを象徴していると考えたようだ。

同じく一九〇二年五月に行われた連合保育会では、氏原が長年の保育経験から「幼児の好む恩物」<sup>①</sup>について考えを述べている。記録によると氏原は、恩物の中で幼児が最も好むのは板排<sup>いたばい</sup>べだといっている。なぜなら、板排べは積木のように崩れることなく、どの年齢の幼児にも適するからだという。二十余年にわたる保育経験から、氏原はここに一つの結論を見出しているのが興味深い。

では、氏原が完全に退職した一九一〇年（明治四十三年）以降の研究活動をみてみよう。退職したからといって、氏原の保育への情熱が冷めることはなかった。研究に励んで、現役の保姆たちの先達であり続けた。退職後の研究活動は、各種の保育大会へ

の出席をはじめ、講習会への参加およびその演説、全国各地の幼稚園を見学して誌上に紹介するなど、多岐にわたっている。そうした経験から、氏原は保育についての知識と見聞を広げ、造詣を深めていったのだ。そしてその成果は、間接的に、若い保姆たちの成長に役だっていた。氏原は現職時代から保姆養成教育には意欲的だったから、後輩の養成と成長のために研究活動が続けたのかもしれない。しかし高齢に達しても常に保育研究を続けたことは、氏原自身が保育者として成長し続けた証といえるのではないだろうか。

退職後も氏原が、絶えず保育者としての自己成長を心がけ、厳しく自分に修養を課したことがわかるエピソードを紹介したい。一九三四年（昭和九年）七月、東京女子師範学校での夏期講習会に参加したときのことだ。講師の倉橋惣三が「保育項目の実際」という講演をした。それをきいて氏原は、自己の実践をふり返り、まちがっていたことに気づいた

のである。倉橋の講演内容は、保育項目に談話がどう位置づき保育に機能しているかよりも、保姆が談話活動をどうとらえ、実践に位置づけていくのか、

というものだった。子どもの生活から生じる談話を保姆が心境に即して受けとめ、応答すること。いつでもそれができるように、手持ちの話を多数用意すること。話すだけでなく、聞く仕方も子どもの心境を理解して聞くことなど。この時氏原は、西天満幼稚園でかつて見習いをした宮崎しかに手紙を書き送った。まず倉橋の講演内容を記し、その上で、当時氏原が教えた談話の解釈や技術にまちがいがあったことを認め、わびている。<sup>⑫</sup>西天満幼稚園時代の氏原は、軍事国家に有用な人材を育てたいと考えていたから、談話といえば修身話が中心だったはずだ。そのような談話活動を実践し、見習い生にも説いてきたことを氏原は反省し、その心境を教え子に告白している。教え子の前で自分の誤りを認め、謙虚にわびて訂正する氏原の態度に、教育者としてあくま

でも真実を追求し、常に前進を心がける姿勢をみることができる。

一九三八年（昭和十三年）七月、氏原銀は熱海市西山の閑静な住まいで八十年の生涯を閉じた。最晩年になってさらに、童話の創作を手がけている。絶筆となったのも「摘草と子供」という童話だった。氏原のかいた童話は雑誌『幼児の教育』に収められているが、どれも勸善懲惡・善行報酬といった、明治・昭和初期の価値観を色濃く反映している。登場する子どもはみな、明るく元気で心根の優しくたくましい子どもに描かれている。おそらく、氏原の追求した理想の子ども像でもあっただろう。

氏原銀は、我が国で初めて幼稚園の保育者養成を目的とする教育を受け、保育者として生涯をまとうた女性である。先例のない新しい試みの連続で、幼児保育の実践をその手で築きあげた功績はまさに「バイオニア」の名にふさわしい。その積み上げた実績の事実が全て、現在の保育に生きているわ



けではない。けれども主体的に保育を創造する力量と、自分に研鑽を要求する姿勢は、保育者の成長の要として大いに学ぶべきところである。

最後に、氏原が一九三四年に自宅で詠んだ短歌を記す。

「述懐」

山阪を覚束なくも辿りけり<sup>おぼつか</sup>

高嶺にすめる月を見るまで<sup>たど</sup> ⑬

——終——

(お茶の水女子大学大学院)

# 〈参考文献〉

- ① 文部省『幼稚園教育九十年史』ひかりのくに昭和出版 一九六九 P. 580
- ② 倉橋惣三・新庄よしこ 復刻版『日本幼稚園史』臨川書店 一九八三 P. 139
- ③ 東京都立大学『人文学報』No. 47 一九六五 P. 81

- ④ 岡田正章他編『保育に生きた人々』風媒社 一九七一 P. 60

- ⑤ 復刻『幼児の教育』第26巻 7・8月号 P. 95

- ⑥ 竹村一『幼稚園教育と健康教育』ひかりのくに昭和出版 一九六〇 P. 166

- ⑦ 京阪神連合保育会雑誌Ⅰ第6号 一九〇一 P. 45

- ⑧ 京阪神連合保育会雑誌Ⅲ第21号 一九〇八 P. 59、

61

- ⑨ 京阪神連合保育会雑誌Ⅰ第8号 一九〇二 P. 55

- ⑩ 同右 第9号 一九〇三 P. 36

- ⑪ 同右 第8号 一九〇二 P. 39

- ⑫ 復刻『幼児の教育』第38巻 8・9月号 P. 32

- ⑬ ⑥に同じ P. 170

# ある日の育児日記から

(54)

佐藤 和代

敬が失業して以来、圭と有はお父さんの送り迎えで保育園へ。私は朝も楽だし、帰りもあわてなくてすむので大助かり。…と思っていました、このごろ不思議と物足りない気分です。

自転車の前と後に子どもを乗せて、坂の多い道を二十分も走るのは大変。でも、朝と夕方のこの時間、けっこう貴重なものだったようなのです。

朝、家を出るまでは本当にあわただしい。食事、着替え、トイレ、持ち物の用意。おたより帳を書いて、自分の仕度もして。でもどんなにバタバタしても、自転車に乗ってしまえば会話が戻っ

てきます。坂道はどうしたってゆっくり行くしかないから、道端のものだってちゃんと見えます。花の名前を教えたのも、虫や鳥を探したのも、みんなこのとき。

もつと保育園が近かったら、いつも思うのですが、朝のバタバタした気分のまま別れるよりは、ずっといいのかもしれない。ゆっくり子どもと話せる時間って、ありそうでいて、なかなかないし。



と「おはよう！」とエール交換（のごときあいさつ）をして、仕事へ。このリズム、捨てがたいものがあるのです。そろそろ送り迎えの役は、お父さんから取り返そうかな。



圭にあやとりを教えたなら意外なほどやみつきに！

# 呼応しあう関係をめざして

伊集院 理子

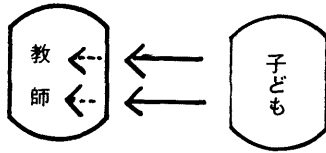
この雑誌の第93巻第7号に、私は、“Sと  
のこと”という文章を書いている。それは、  
以前に私が担任し、とても苦勞をした子ども  
と私との関係について書いたものである。

— Sは何をしてくすか分からない、Sが荒  
れだしたら手に追えない、という考えがいつ  
も私の心を覆っていた。一方、Sのような無  
理をしいられている子どもは、良い所も悪い  
所もまずは丸ごと受けとめてあげなければい  
けないという概念的な考えにも私の心は縛ら

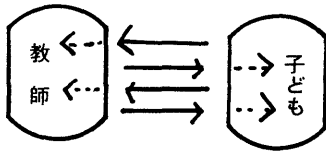
れていて、その両者の間を揺れ動いていた。  
今から思えば、Sが荒れだすとまずは力で押  
さえこんで、その後、慌てて「先生は、S  
ちゃんのことよく分かっているわ。Sちゃん  
は、〇〇しなかったから、〇〇しちゃったの  
よね」などと、勝手に解釈したSの気持ちを  
押しつけていたように思う。(略) Sの本当  
の気持ちを受けとめるのではなく、今から思  
えば、Sに迎合してしまっていたように思う  
—— こう書きながら、最後の「迎合してし

まった」という言葉では言い尽くせなかった自分の思いというのがずっと残っていた。

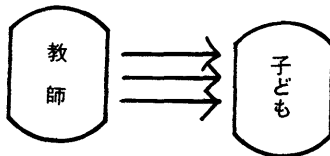
私は、Sのことをありのままに受けとめよう、受けとめようと思っていながら、少しも受けとめられていなかったのである。それは、何故なのか。その当時、私は、一方通行の形ばかりの受容（A図）を試みていたのだと思う。形だけの、いつも同じレベルの受容を心に描いていて、目の前のSときちんとし



A図



B図



C図

たやりとりが結べていなかったのではないだろうか。本来、人と人との関係というのは、どんな関係においても、一方通行では深まっていけないものである。関係が両方向性のものである、はじめて、関係としての基盤ができ、そのやりとり（B図）を積み重ねていくことで関係が深まっていくのだと思う。人を受容するということも、A図のような一方性のものでは決してなく、B図のような両





てきて、それを私がうれしく受けとめることがある。同じ手をつなぐのでも、色々な手の

つなぎ方がある。自分の思う方向に無理矢理相手を引っばっていかうとする手のつなぎ方。強引な相手に引っばられるつなぎ方。手を差しのべると、すっと手を握り返して、柔らかくお互いの手の感触を感じあいながら握りあうつなぎ方。ふと手を差しのべた時に、子どもの柔らかい手が何のためらいもなく握り返された時、私は何よりうれしく思う。

中には、手を差しのべても、手が返ってこないこともある。まだまだその子とは呼応しあう関係になっていないのだと思い、自然にその子が手を握り返してくれる日までもうひとがんばりだと自分に言い聞かせている。

Y君が、危険な高い所に登っている。そばに寄って行って私が両手をひろげて差しのべると、Y君は、私の胸の中に自分の身体を預

けてくる。私はY君の身体を柔らかく抱きしめ、下に降ろす。

H君が、庭で水遊びに余念がない。時間はもうお帰りを目前にしたお片づけの時間。「H君のこと抱っこしてお部屋に帰ろうかな」。H君は水遊びをやめ、H君のすぐそばにしゃがんだ私の胸の中に飛びこんでくる。やさしく抱きあげ部屋まで連れていく。

「危ないから降りましょう」「もうお片付けだからやめなさい」といった言語的な働きかけではなく、身体と身体と呼応で響きあえたことがとてもうれしかった。

——一人ひとりとのかたまり——

Rは、大人の中で育ってきた一人っ子の子どもである。Rは、大人のレベルでの会話の中で生活してきていて、ともすると、大人の言葉を聞き流すことを身につけてしまってい

るように思えた。淡々と独自の世界でマイペースに遊んでいる時と、ふとした時に衝動的に脱兎のごとくに困ったことをしでかす時との差が激しかった。そんな時、「急にRちゃんが○○して、びっくりしちゃった」などと論すように言っても、こっちの耳から入ってそのままあちの耳へ抜けていくという感じで、Rの心に全く届いていかないのである。そんなRに対して、Rのやりたいことを認め、それに呼応していくことを心がけてきた。何度も同じことを繰り返して伝えるのではなく、こちらの伝えたいことがRの心に届くような伝え方を色々と模索してきた。

Rは、衝立や柵や積木や椅子などを使って大々的な構築物をつくることを好んでいた。ある程度自分の満足できるものが出来あがると他の遊びに移っていくことがよくあり、他の遊びをしている間もその構築物はそ

のまま残されたままにされるため、その構築物に使われている衝立や柵などを他の子どもが遊びの中で使いたくなることがよくあった。そういう時は、事あるごとに、遊んでいるRの所まで行って、他の友だちが使いたがっていることを伝え、それを使っていかが承認を求めるようにした。その間、友だちには待ってもらうようにした。はじめは、「ダメ」ということも多かったが、そのうち「衝立だけね」とか「柵だけね」とか言って、その使用を承認してくれるようになった。そんなことなどを通して、こちらとRとの言葉のやりとりがしだいにきちんと噛み合うことが多くなっていった。

ある時、私がおかの用で廊下にいたら、部屋から大きな泣き声が聞こえてきて慌てて部屋にかけつけてみると、Rが泣いていた。ちよっとしたことではわざと大げさに泣いてい



るように思えたので、「Rちゃん、ちょっと大げさ」と言うと、ニッと笑って「エヘ」と言って泣きやんだ。小さい出来事であったが、Rとの間でそういうやりとり、呼応ができたことが私にはとてもうれしかった。

入園してしばらくは、すぐそばにいて話していても、Rの頭の上を私の言葉がむなしく通りすぎる感じがしていたのであるが、この頃では、少し離れたところからの私の発信もRはちゃんと受けとめてくれていると実感することが何回もあった。そうなってくると、近い所にいる時はこちらのこと、遠くからのRの発信への私の感度もぐーんとあがってきていることが感じられる。

Rに対しては、Rとの呼応のあり方を色々と探りあててきた。他の子に対しては、また別の呼応のし方がそれぞれにあるのだと思う。一人ひとりの“今”と、呼応しあう関係をていねいにつくりあげていきたいと思っている。“今”と、今に力点を置いたのは、ともすればこれまでの子どもたちの育ちとか、こうあってほしいと願う子どもと呼応しようとしてしまうことが多々あるからである。一人ひとりの“今”と呼応しながら、子どもと自分とのやりとりを楽しんだり、味わいながら一日一日を大事に過ごしていきたいものである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

# 編集後記

六月になると、手打ちうどんを思いだします。以前、学童保育クラブに勤めていた時のことです。小学校の開校記念日が六月で、その日は休校のため朝からクラブに子ども達が集まります。梅雨時なので遠足などの行事も組めず、室内で、班毎に手打ちうどんを作って食べるというのが毎年の恒例でした。まず、小麦粉に水と少々塩を混ぜ、バラバラとほぐすようにしてから一つにまとめ、こねていきます。水の分量が微妙で、耳たぶぐらいのちょうど良い固さでよくこねて、三十分ぐらいねかせます。中には、白いはずの生地が薄汚れていて、手の方がきれい(?)と

いう班もあります。次に麵棒でのばし、たたんで細く切り、ゆでます。ゆで上がったら水でよくさらし、冷し手打ちうどんのでき上がり。指導員特製のおいしいつゆで食べました。途中、小麦粉で粘土遊びをしたり、麵棒でチャンバラをしたり、お楽しみやら叱られたりのうどん作りですが、できばえの方は好評!! 自分達で打ったしこしこ麵に満足のようにでした。梅雨時、衛生面を考えると、やりにくい行事ですが、実はやりやすい面もありました。大勢で順番にこねたりのばしたりする上、子ども達の手は温かく、普通の時では、麵をのばしていくうちにどんどん乾燥してしまうのです。その点、湿度の高いこの時期は、意外にも手打ちうどん作りには好都合。二倍も三倍も楽しめました。(K)

## 幼児の教育

第九十四巻 第六号

(一九九五年六月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

発行 平成七年六月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二一ー一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 圖書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五一一二一ー

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六一一四一九

☎〇三ー五三九五ー六六〇四

振替 〇〇ー一九〇ー二一ー一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレー

ベル館にお願いいたします。

ザ・ペープサートの続刊。

劇の演じ方、人形の作り方などの解説つき。

演じる先生と子どもたちが対話しながら楽しめます。

- ①「へっこき嫁さま」
- ②「チッチとブイの魔法はね」
- ③「いじわるゴリラをやっつけろ」
- ④「きつねがいっぴき」



阿部 恵・著

B5変型判・80頁・定価 2,500円（本体 2,427円）

いきいき保育資料①（中谷真弓・著）

**ザ・エプロンシアター①**

- ①「はらペコ かいじゅう」
- ②「おふろに はいろう」
- ③「ねすみの すもう」

いきいき保育資料③（中谷真弓・著）

**ザ・エプロンシアター②**

- ①「まる さんかく しかくなあに」
- ②「ウサギさん インフルエンザ」
- ③「大きな カブ」

いきいき保育資料⑤（中谷真弓・著）

**ザ・エプロンシアター③**

- ①「みんな ねんね」
- ②「りんごの木」
- ③「せんたくしましよう」
- ④「どうぶついっぱい」

いきいき保育資料②（阿部 恵・著）

**ザ・パネルシアター①**

- ①「三枚の おふだ」
- ②「ころころまてまて」
- ③「おばけの いっつごちゃん」

いきいき保育資料④（阿部 恵・著）

**ザ・パネルシアター②**

- ①「ももたろう」
- ②「おおきくなったらね」
- ③「ハッピーバースデー お月さま」

いきいき保育資料⑥（阿部 恵・著）

**ザ・パネルシアター③**

- ①「ヒツジかいとオオカミ」
- ②「たまごがころん あれあれ」
- ③「あいうえ王子」

いきいき保育資料⑦（阿部 恵・著）

**ザ・ペープサート**

子どもと対話しながらストーリーを進めていく、新しい形式の紙人形劇です。  
演じ方や人形の作り方などの解説つき。

いきいき保育資料⑧（長縄素子・都丸つや子/共著）

**ザ・テーブルシアター**

- ①「ひかりちゃんのおにわ」
- ②「てぶくろが化けたとさ」
- ③「プレーメンの音楽隊」
- ④「さるとかにのおはなし」

B5変型判・各80頁・各定価 2,500円（本体 2,427円）

キンダーブックの  
**フレーベル館**

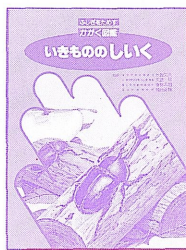
# ふしぎをためす かがく図鑑

調べる図鑑より一歩進んだ「やってみる図鑑」です。  
実際に体験して得た知識こそ、ほんとうの知識です。  
「かがく図鑑」は、実体験のお手伝いをします。

監修／東京大学名誉教授 水野丈夫

## 特長

- ①「しっかりした、役に立つ、基本図鑑」で、何年も使える財産になります。
- ②美しいスーパーリアルイラスト、撮りおろし写真を使用しています。
- ③好評《しぜん図鑑》と同じ仕様で、書棚にきちんと並べられます。
- ④子どもだけでなく、保育者にも役立ちます。
- ⑤各見開きごとに完結した記事で、使いやすく構成しました。



## ①いきもののしく

監修／元東京都多摩動物公園 園長 矢島 稔 富士自然動物園協会 今泉忠明 国立科学博物館 武田正倫

昆虫（約30種）、動物（約10種）、鳥（約10種）、水の生き物（約20種）を取りあげました。飼育方法、飼育しながらできる観察のポイントなどを詳しく掲載。園でのウサギやモルモットの飼育、クラスでのザリガニやオタマジャクシ、カブトムシの飼育にも役立ちます。



## ②しよくぶつのさいばい

監修／テクノ・ホルティ園芸専門学校 肥土邦彦

花（約80種）、野菜（約40種）を取りあげました。美しい花のイラストや写真、詳しい栽培方法を掲載。見て楽しむだけではない、観察のポイントも。園児と一緒に園庭に花壇を作ったり、鉢植えを楽しんだり、簡単な野菜の栽培をしたりと、いろいろ利用できます。



## ③かがくあそび

監修／国立科学博物館 村松伸弘

鏡や虫眼鏡、磁石を使った簡単な科学遊び。水や氷の性質が、楽しみながらわかる遊びを取りあげます。シャボン玉遊び、花びらを使った色水遊び、砂場での遊びなど園の活動の中でも使えます。

A4変型判・各116頁・定価各2,000円（本体1,942円）セット定価6,000円（本体5,826円）

キンダーブックの  
フレーベル館